

早すぎる結婚が少女の将来を奪う

関根 一貴

2017年度採用(5期生)

修学機関:東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻 博士後期課程3年次

研究課題:The causal effect of child marriage on contraceptive use, fertility and high-risk pregnancies in Nepal

略歴(せきね かずたか)

テンプル大学教養学部卒業後、バーミンガム大学から貧困削減・開発マネジメント修士号、ロンドン大学公衆衛生・熱帯医学大学院から公衆衛生修士号を取得。2006年から日本のNGOからインドネシアと東ティモールに派遣され、保健事業と緊急復興に従事。2009年から国際協力機構にてアフガニスタン支援と保健事業の計画等を担当。2012年から国連児童基金にてパキスタン、ネパール、シエラレオネで勤務し、2018年から国連人口基金のミャンマー事務所にてリプロダクティブ・ヘルス事業を担当。現在、東京大学医学系研究科国際地域保健学博士課程の3年次に籍を置き、児童婚に関する研究に取り組む。

「児童婚」とは

誰と結婚するか、何歳で結婚するか、もし自分の意思で決められないとしたらどうでしょうか？南アジア、アフリカ地域の多くの国では、18歳未満の子どもたちが、自分の意思とは関係なく半ば強制的に結婚させられる、いわゆる「児童婚」に曝されています。児童婚では、多くの場合、少女が年の離れた男性と結婚させられ、家庭内での意思決定において非常に弱い立場に置かれています。私が研究対象としているネパールでは、20-24歳の女性の40%が18歳未満で結婚しています。なかには12歳で結婚する少女もいます。ネパールでは以前から18歳未満の結婚は違法であるにも関わらず、児童婚は何十年も前から伝統的慣習として蔓延しています。

児童婚は、持続可能な開発目標(SDGs)の目標5「ジェンダー平等と女性のエンパワーメント」のターゲット5.3にある有害な慣習に指摘されているように、ジェンダーに基づく暴力の一つであり、深刻な人権侵害です。また、児童婚は多くの開発課題とも結びついていることがわかっています。例えば、児童婚は少女の学校からの退学と相関関係にあ

り、少女の教育の機会を奪っています。18歳未満で結婚した女性は、配偶者からの身体的・性的な暴力にあうことが多く、性感染症のリスクも高くなります。また、早期の妊娠、望まない妊娠、流産または墮胎の確率が高くなります。児童婚の女性は夫から外出の制限をかけられ社会的に孤立しやすく、自殺率が高い国も報告されています。さらに、18歳未満で結婚した母親から生まれてきた子どもは病気や栄養失調の割合が高いこともわかっています。

このような課題に取り組むため、私は児童婚の問題を研究テーマに選びました。具体的にはネパールにおいて児童婚が避妊具の使用、望まない妊娠、流産または墮胎、間隔の短い出産、既婚女性1人当たりの出生数(注)にどのような影響を与えるかについて研究しています。児童婚は他の開発課題に比べて研究件数が多くはないため、研究を通じてより多くのエビデンスを蓄積し、児童婚の撲滅が国レベルで重要課題として認識されるよう貢献することを目指しています。

博士課程への進学

仕事をしながらではあるものの、博士課程に進学することに自然と迷いはありませんでした。これまで一貫して途上国の公衆衛生に仕事で関わってきて、緊急支援、妊産婦保健、HIV・エイズ予防、青年期の保健、保健情報システム、医薬品のサプライチェーン、モニタリング・評価等、様々な分野を仕事にしてきました。しかし、国を移動するたびに仕事内容も変わり、一つの分野を継続して掘り下げることができず、特定分野の専門家を名乗れるまでには至っていませんでした。しかし自分が情熱を感じられる研究テーマに出会ったことで、研究で実績を積んで、専門性を高めようと考えました。

研究で分かっている知識やエビデンスを国際開発の現場で使うという意識は強いものの、日常の業務では、十分に時間を取って深く調べて考察するだけの余裕がありませんのが現実です。博士課程の研究では、文献を読み込んで、研究計画を立て、精緻にデータを分析し、誰も見たことがないであろう分析結果を見た時の高揚感、仕事とは違う醍醐味があります。また、研究テーマは自分で自由に決めることができる上に、研究は一生続けられるものなので、目的意識と向上心を持って長く続けていければと思っています。

現在、博士課程の研究では定量的分析に基づいた論文を執筆しているところです。先行研究では分析手法として多重回帰分析を使い、児童婚とその結果の相関関係を検証しているものの、因果関係を実証することはできていません。私の研究では、選択バイアスや交絡因子の可能性をできるだけ排除し、より厳格な因果推論が可能な研究デザイン

を使用しています。FASID の奨学生として論文を書いて出版し後世に残すことで、国際開発の前進に寄与することを目指しています。（写真: 筆者撮影）

（注）15歳から49歳の既婚女性のみをサンプルとした女性一人あたりの出生数を意味し、その年に生まれた人口1000人あたりの出生数を指す「出生率」や、一生の間に一人の女性（15歳から49歳）が生む子どもの数を指す「合計特殊出生率」とは異なる。

【ネパールとインドの国境に接する街の様子】

